

て、天下の畫工を集て、龍を繪かゝしめ翫弄いたされ候。餘り龍を好まるゝ志深きがゆゑに、何とぞ一度眞龍を見たく被存候所、或時眞龍あらはれ出で、意より面をさし入候所、葉公大に駭て逃入被申候と申、戯れの作り物語御座候。此ごとく古の聖賢の格言・偉行を、書籍のうへにて面白く數寄候へども、只今如此の聖賢御出被成候は、如何の御挨拶にて可有御座候や、其所難計候。凡古今の通病にて、耳を信じて目を賤み申候。是皆其所爲を推と不推とのたがひ迄に候よし、被講候旨。

右講説、明快痛切の論と云べし。故に詳に記于此。

一、孔門傳授の心法といふ事

先生爲某説話數件如左。先生問て云。

中庸は乃孔門傳授の心法、此傳授の心法と云事を、いひ解きてみよと被仰候に付、某云。聖人の御心は即中庸の道理に不外候。其御心を寫し置候て、學者の法則に仕候儀也。故に傳授の心法と申事と存候旨申候へば、左様に申候ても大違は仕間敷候へども、左様にては不可有之候。左様に申時は、今の中庸の書を持て來て、此心の法則にするといふ

もの也。左様にては心と法と二つに成候。此法の字は詩經に有之、有物有則の則の字と同事故、朱子も法は則也と被仰候。扱天下の物いづれか則なきの物あらんや。目あれば明にて見ると云の則あり、耳あれば聴にてきくと云則あり。鼻口は物をかぎ、物を味ふの則あり。心の一物は衆理を具へて萬事に應じ、未發之中、中節之和、是皆心の則也。若少にても無則の心あらば、心とは不可爲。事々物々無則之物は無之候。其内人心は右の通りに、至虚至靈、妙用不測の物にして、聖人は其則を毫末も不被失候て、中和を極られ候。其心法を寫出して、中庸の書に被成候へば、乃傳授の心法と云のみ也。か様にいひてつかへなきかと存候。先生にも近年迄、某が見の如く御覽被成候所、近年佛氏の學は、心法を併せて滅すと、誰やらんが語にて御心附被成候。此所の心法の二字を、某が見の如く存じ候ては、語意支へ候て通じ不申候よし。先生問て

心法を併て滅す。張子正蒙に見えたり。

一、中庸首章理氣の辨

中庸首章章句に、天以陰陽五行。化生萬物。氣以成形。而

理亦賦焉。猶命令也。云々。此所の天命の字は、専ら道理迄にて申候て、氣は不雜候事は、各程の學者は誰も存知候事に候。然るに此所の章句に陰陽五行といひ、氣以成形といひて皆氣を連ねて説來て、理亦賦焉猶命令也と云にて道理をいへり。此氣を以て説きながら、天命の命は、専ら理上にて説くといふは如何と、難問を申かけ候所、御答は如何可有之や承度候。金澤にて藏人を始め新八・武兵衛、か様の所見解如何可有之や。數寄の儀に候間罷歸承可申候。先づ某は如何可申やと被仰候。一句も口を難開御座候間、只御發明の所承度候旨申候所、先生被仰候は、金澤に罷在候時分迄は、か様の所心付不申候。文義や句面にては難參候。一つの比喩を以て可申入候。御自分を相公様より、徒頭を被仰付候。此被仰付候は命令にて、御自分の職分にて候。扱其徒頭といふもの、藤太夫といふ人の身ばかりありて、何ほど被命候へばとて可被勤様は無之候。先づ何百石といふ知行の祿有之、扱家屋鋪とそれ〴〵に上より被下候て事足申候。か様に色々被下もの有之候得共、只今其方は何の職分ありやと問ふ時は、徒頭を被仰付候と迄申候。知行・屋

敷等は申に不及事、頓着のなき事に候。此被仰付候と申は命令に候。天命を得て人と成、物と成、それ〴〵に皆先づ陰陽五行の氣を稟て形を成候は、彼知行・屋敷にて候。一の天理を賦與被成候は、彼職分にて天命に候。是専ら道理迄を以ていうて、陰陽五行の諸道具は申に不及事、頓着のなき事に候と被仰候。扱々超然の見と、不覺擊節て感得仕候。同上

一、經義を玩ぶと申す事の眞義

玩索・玩味・凡味の字は、物をもてあそびものに仕儀に候故、いはゞ不恭の語にて、經書を玩ぶ、經義を玩ぶなど、申事、不相應成様に聞え候。程子・朱子の經傳の註を被成候は、一字も胡亂成事無之候。然に玩の字は、幾所といふ事もなく用被申候。深意のある事に候。今秘藏に存じ候香爐・茶入などにて、床に置き棚に飾などいたしたる迄にては、崇敬仕迄にて愛玩いたすと申ものにては無之候。眞實心の底より秘藏に存じ候ものは、必ず手に取り、幾度といふ數もなく打かへし〴〵手馴、又或時は急度棚に置いて看、又手にすゑなどいたし候へば、只今迄見出しも不仕景も見出